

俳句

8月13日(土)  
当季雑詠

小笠原さちを

ワイパーに水の溢るる夕立かな

タオルケット胸に引き上ぐ夜の秋

9月17日(土)

南国市 紀氏邸址

小笠原さちを

京徳ぶ句碑に鳴きつぐ法師蟬

貫之の歌碑に影さす薄紅葉

三十五箇の思ひて十九

シーズンⅡ

奈良 夜都伎神社

松山 和雄

奈良からの「万葉まほろば線」の電車は乗客もまほろばで、車窓からの景色がことのほか広く見える。沿線の新しい住宅街からや離れた里山の麓には、たわわな実をつけた柿の木のある古びた民家が点在し、美しい景観をみせている。そんな景色が右から左へ走馬灯のように現れては消えてゆく。

流れゆく窓枠の中の「画」をぼんやり眺めていると、車内に「次はナガラウナガラウ」と初めて聞く駅名がアナウンスされた。駅の標識を見ると、今回の目的地、「石上神宮」のある天理は先ほど過ぎたところ。あわてて降りて戻りの電車を調べたが、あと半時間ほどの後になる。幸いにもホームから個人タクシーの看板が見えた。配車をお願いして待つ間、周辺の観光案内を見ていると近くに「夜都伎神社」という珍しい茅葺の社殿の神社があるらしい。これも何かの縁、「石上神宮」にもそう

五まじり話に出ました。三十分の間に話さなければならぬ。お世話はいいです。長い間お世話をしました。ありがとうございます。また便宜をはかってくれました。「高退協」ありがとうございます。

短歌

暇なきがうらめし

「換気扇掃除」とメモし三月たちようやく今日は油拭えり 山本晶子

白光りせる換気扇を先ずは眺めレンジ見つつ料理にかかる

「襦袢修繕」とメモし一年なかなかに取りかかる暇なきがうらめし

斑鳩の救世観音と奈良興福寺の阿修羅像

夢殿の救世観音に出会ひたる春に開帳日の胸のときめき 榊原忠彦

(米国の哲学者・美術研究家フェノロサにより世に出た、長年秘仏として拝観できなかった夢殿の本尊。春彼岸にたまたま訪れた私を感動させる。)

入江撮るきゃしゃな肢体の美少年顔は三面腕は六本

(「入江泰吉」は写真家。大和路の風物を撮りつづける。)

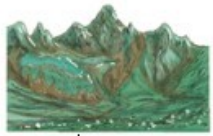
「九条は室」

「九条は室」の看板しかと見る山岡靖夫氏の遺筆の力

「戦争はさせない行かない」デモの列ペットボトルを鳴らしつつ行く

思い寄せ力出し合い刷り上がる「短歌九条の会こうち」会報

叶岡淑子



御輿台

西村雅人

遠くない。ちよっと寄り道をしてみることにした。集落から少しはなれた細い道を進むと行く手の枯れ色に染まった田畑の中に、この時期は紅や黄に色づいた鎮守の杜が、ぼっかりと島のように浮かんでいる。道路わきにタクシーを待たせゆるやかな参道を進むと、木々に深く覆われた広場の先に、茅葺の社殿が小さな島に引き上げられた葦船のようにひっそりと建っていた。まわりには人と車の行き交う姿もなく、耳をすませばモミジなど木々の葉が風に吹かれて「せせせら」のような音を奏でる。ときわりの強い風には、黄葉・紅葉が吹雪のように舞い落ちて、季の移るのを感じさせる。その向こうに軒を低くおさえ音むした茅葺の屋根がたたずんでいる。もうすぐ師走、世の中の時間は速くすすんでいることだろうが、ここは別世界のよう、時間にゆるく流れている。名残を惜しみながらも再びタクシーの待つ場所に戻ると、道の際に縁起を記した木板が

この坂の途中にかつて私の家があった。ちいさな丘を右に左にうねりながら上へ上へと坂を登っていると、半世紀前に聞いた今は亡き人々の声が耳の底でさわぎ始める。祭りの日、この坂に響きわたった御輿をかつぐ男たちの荒々しいかけ声を引き戸を開けて、祖父は坂道に出ると、白装束の男たちに声をかけた。すると一升瓶が踊るように廻ってきて、祖父はラッパ飲みをしようと隣の男にわたした。御輿の人ごみにまぎれ、男たちのさわめきにまぎれ、祖父は坂を上へ上へと遠ざかって行き、二度と帰って来なかった。

坂道を登り切ると、村で一番高い広場に着く。そこに古びた御影石の台座があり、「御輿台」と文字が刻んである。御輿台からわきあがる、亡き人々の声がまざり合い、上へ上へと空に昇って行く。